ISSN 1343-3091

Jul. 2026, Vol. 102

# Megaptera

メガプテラ



## Contents


- 2025/2026ザトウクジラシーズン報告
- スピンジャンプからハシナガイルカの雌雄判別を試みる
- 小笠原群島のシロワニ調査：シロワニは何個体いるの？
- 汗をかきかき、いざ夏の母島の山へ！
- OWA活動レポート 2025年度
- なんでも通信


発行：一般社団法人
小笠原ホエールウォッチング協会
〒100-2101 東京都小笠原村父島字東町
Tel 04998-2-3215 / Fax 04998-2-3500
URL https://www.owa1989.com/
E-mail info@owa1989.com

# 2025/26ザトウクジラシーズン報告

小笠原ホエールウォッチング協会　辻井浩希

2025年10月27日、いよいよBしっぷ前にクジラのぼりが泳ぎ始めました。そう、2025/26シーズン初となるザトウクジラが確認されたのです。確認場所は父島列島の西島周辺（タコ岩付近）で、翌日にも、同じく西島周辺で1頭のザトウクジラが観察されました。10月中にザトウクジラの確認が報告されたのは、2006/07シーズン以来です。例年よりも少し早い幕開けとなった今シーズンは、どのようなクジラ模様となったのでしょうか。定点目視観測や個体識別調査の結果とともに、その様子を振り返っていきたいと思います。

OWAでは、毎年12月から翌年5月までの半年間、毎朝、父島のウェザーステーション展望台からザトウクジラの定点目視観測を実施しています。今シーズンは、天気・海況不良の日等を除いて計117日間調査を実施し、のべ1,023群1,667頭のザトウクジラを確認しました。

図1は、直近3シーズンにおける半月ごとの平均発見頭数の推移を示しています。今シーズンは、10月の初確認以降もザトウクジラの確認が相次いだものの、早い時期から発見頭数が大きく増えることはなく、12月前半の平均発見頭数は1頭に満たず、12月後半も平均2頭程度にとどまりました。しかし、1月以降は順調に発見頭数が増加し、2月前半には平均約27頭を記録して今シーズンのピークを迎えました。また、2月後半も同程度の水準を維持し、3月中も平均20頭以上を記録するなど、急激に数が減少することなくシーズン中盤が過ぎていきました。4月に入ると、前半は平均12頭程度とピーク時の半数以下に減少し、その後も発見頭数は少なくなっていきました。5月は、観測を実施した計17日のうち9日でザトウクジラが確認され、今シーズンの定点目視観測における最終確認日は5月23日となりました。

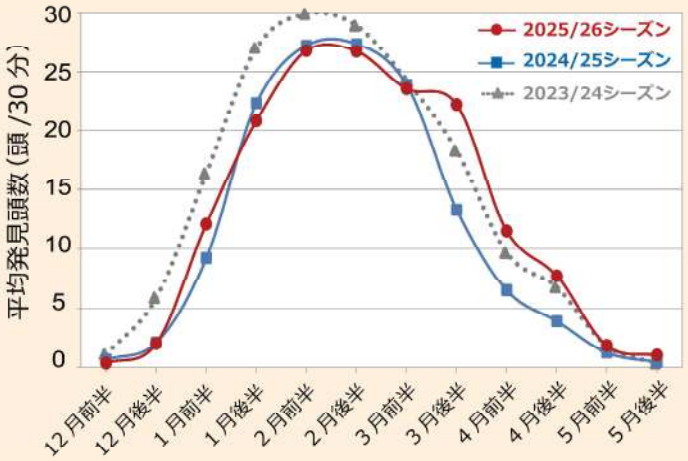



図1. 定点目視観測におけるザトウクジラの平均発見頭数の半月毎の推移



図2. （左）モッチーニ（BMN-322）と（右）ノア（BMN-960）の尾ビレ

今シーズンを総括すると、3月前半までは昨シーズンと同様に、一昨シーズンよりも発見頭数が少ない傾向にありました。一方で、3月後半以降は、過去2シーズンよりも多くのクジラが観測されたシーズンであったと言えます。こうした年による来遊推移の違いは、海洋環境と関連して変動しているのでしょうか。将来的には、シーズンごとの来遊推移の違いに関係する要因を明らかにするための解析も進めていきたいと思います。

さて、2025/26シーズンも、認定NPO法人エバーラスティング・ネイチャー（ELNA）と共同で、ザトウクジラの個体識別調査を実施しました。調査で撮影した写真と皆さまからご提供いただいた写真を合わせ、1,000枚以上の尾びれ写真（重複含む）を収集することができました。「モッチーニ」や「ノア」の愛称で親しまれている有名個体が仔連れで確認され、島内でも話題になったことが印象深く残っています。

モッチーニは、毎年のように小笠原の海に帰ってくる、1992年生まれのメスのクジラです（図2）。今シーズンの初確認時（2月13日）は成体2頭の群れでしたが、3月9日に確認された際には仔クジラを連れていました。どうやら、彼女はこの間に出産したようです。前回仔連れで確認されたのは2022/23シーズンであるため、今回は3年ぶりの出産であると推測されます。

ノアは、尾びれの右側に「X」のような模様があるメスのクジラです（図2）。1月から3月にかけて、仔連れで過ごしている様子が何度も確認されました。ノアは自ら船に近づいてくるクジラとして知られており、今シーズンも多くのツアー参加者を楽しませてくれたようです。これらの個体に限らず、多くのクジラたちにとって、小笠原の海が子育てのために安心して帰ってくることのできる場所であり続けられるよう、今ある良い環境を未来につないでいきたいですね。

最後になりますが、今シーズンも貴重なデータを提供してくださった方々をはじめ、調査にご理解とご協力をいただいた皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。なお、今シーズンの個体識別調査は、「公益信託ミキモト海洋生態研究助成基金」による助成を受けて実施されました。

# スピンジャンプからハシナガイルカの雌雄判別を試みる

帝京科学大学　前田賢治・篠原正典

## はじめに

帝京科学大学・篠原研究室では、小笠原諸島に生息するハシナガイルカの基礎生態を明らかにすべく、2018年よりOWAと共同で背びれ画像を用いた個体識別調査を行っています。その結果から、推定個体数や列島間（聟島・父島・母島列島）を移動する個体が少なくないということなど、さまざまな知見が得られ始めてきました。しかし、ハシナガイルカの生態を理解する上で基礎となる雌雄に関しての情報は皆無でした。そこで今回、彼ら自慢のスピンジャンプを利用することで、雌雄判別を試みましたのでご報告します。

## 雌雄判別方法

イルカの雌雄判別には、①繁殖行動の観察、②性染色体の解析、③乳溝（Mammary Slits）の確認、④保育行動（授乳や同伴）の観察など、いくつかの方法があります。

同じ小笠原諸島に生息するミナミハンドウイルカでは、調査者が水中でイルカと並泳しながら撮影を行い、授乳行動や乳溝の有無を確認することで雌雄判別が可能です。しかし、ハシナガイルカは遊泳速度が速く、水中での接近調査は彼らにストレスを与える可能性があるため実施されていません。そこで本研究では、ハシナガイルカの特徴的な行動であるスピンジャンプに着目し、乳溝の直接観察を行いました。なお、鯨類では、生殖孔の両側に乳溝が存在する個体はメス、乳溝が存在しない個体はオスと判別されます（図1）。

## 結果と考察

およそ3万枚の写真を解析し、148回のスピンジャンプから得られた377枚の画像を分析した結果、オス4頭、メス16頭、判別不可128頭となりました。また、このうち個体識別まで行うことができたのは、オス3頭、メス1頭でした（表1）。

スピンジャンプ中の個体を撮影することは難しく（またその際は、広角に戻して撮影することも多く…）、多くの画像で画質



図1. スピンジャンプ時に腹部が確認できたオスのハシナガイルカ

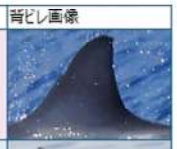
| 性別 | 生殖孔画像 | ID番号 | 背ビレ画像 |
|---|---|---|---|
| メス |  | BSL-377 |  |
| オス |  | BSL-410 |  |
| オス |  | BSL-269 |  |
| オス |  | BSL-503 |  |

表1. 雌雄判別に加え、個体識別もできた4頭

やピントが十分ではなかったため、雌雄判別および個体識別が困難でした（377枚/34481枚＝約1％）。

メスと判別された個体が多かった点に関しては、解析上の問題も感じられました。画質がやや粗い画像であっても、乳溝が確認できればメスと判断できる一方で、オスの場合は「乳溝が見えない」ことと「乳溝が存在しない」ことを区別する必要があるためです。そのため、本研究ではピントが十分に合い、乳溝が存在しないことを明確に確認できた画像のみオスと判定するという厳しい判断基準を設けました。この判断基準は、個体識別までできた個体にオスが若干多かったことにも影響している可能性があります（3/4頭）。オス判定に用いた一連の画像は高画質なものに限定されていたため、背びれの特徴も確認しやすく、個体識別もしっかりできたと考えられます。

## 今後の課題

現在、個体識別されている300頭以上の個体のうち、雌雄判別ができた個体は4頭にとどまっています。今後は、より多くの個体について雌雄判別を行うため、スピンジャンプ以外の手法についても検討する必要があります。また、雌雄が判明した個体の列島間移動や個体間関係などの特徴を明らかにするため、継続的な調査を進めていきたいと考えています。最後に余談ですが、解析した画像の中でコバンザメが付いていた個体はオス1頭、メス1頭と少なく、「スピンジャンプはコバンザメを振り落とすための行動である」という一説には、疑問を投げかける結果となりました。

## 謝辞

本研究にあたり、画像をご提供いただいた小笠原ホエールウォッチング協会の皆様に深く感謝申し上げます。

# 小笠原群島のシロワニ調査：シロワニは何個体いるの？

NPO法人小笠原シロワニ保全研究会　中村雅之

シロワニは、大西洋、インド洋、西太平洋などの亜熱帯から温帯域の沿岸域、主に水深10～40mのサンゴ礁や岩礁域に生息します。また、海外の先行研究では最大分布水深230mという記録もあります。

繁殖様式は卵食・共食い型の胎生で、最初に生まれた最も強い胎仔が子宮内で卵食・共食いし育ちます。妊娠期間は9～12か月で、体長が1m前後になるまで大きく成長した個体が、左右の子宮から1頭ずつ生まれます。しかし、成熟年齢が遅く、繁殖周期が2年で、浅い沿岸生息地を好み、集団で集まるという生態から、人為的な影響を受けやすいため、近年個体数が減少し、国際自然保護連合（IUCN）レッドリストでは絶滅危惧種に分類されています。また日本国内では、2017年に公表された「海洋生物レッドリスト」により、絶滅危惧ⅠB(EN)に指定されました。日本近海では、1960年代に東シナ海大陸棚沿岸での採集記録がありますが、近年、正式な記録がありません。そのため唯一、小笠原群島が、国内最後のシロワニ生息地と言えます。

## 画像によるシロワニ個体識別調査

シロワニの体側には、ヒトの指紋のように各個体で異なる特徴的な斑紋があります（図1）。この斑紋を標識として用いて個体識別することで、標識再確認法という技法により生息数を推定することができます。小笠原群島に暮らすシロワニ生息数を求めるため、2018年から画像によるシロワニ個体識別調査を開始しました。2025年7月現在、左体側画像より120個体（オス:メス:性別不明=60:59:1）、右体側画像より119個体（62:56:1）、左右両側の体側から87個体が識別登録されています。また列島間のシロワニ移動についても、嫁島と父島間で2個体、母島と父島間で9個体が移動していることが確認されました。

## 二見湾への高い依存度

父島列島で撮影された108個体（58:49:1）の内、91個体（49:41:1）が二見湾内で撮影され、父島列島で撮影された個体群の二見湾への高い依存度が明らかになりました。

## 衛星発信機と音響タグの装着

ダイビングショップの皆様への聞き取り調査から、シロワニは秋から春期に父島の二見湾やマルベリ、弟島の鹿浜に滞在し、夏季に姿を消すという情報が得られました。このヒアリング



図1. シロワニの撮影風景(体側の斑紋)

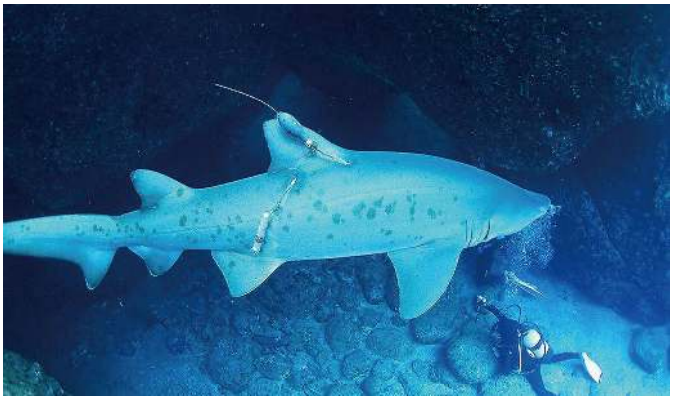


図2. 衛星発信機(MiniPAT)(背鰭位置)と音響タグ(V16)(右体側)

結果を検証するため、2020年2月、ジョージア水族館からの機材提供と技術協力のもと、シロワニ5個体を初めて捕獲して衛星発信機（MiniPAT）と音響タグ（V16）を装着し（図2）、夏季のシロワニ滞在場所の調査を実施しました。

装着した衛星発信機5個のうち、1個の発信機がポップアップしましたが、発信機についた付着生物の重さで、切り離し後すぐに浮上できなかったため、切り離された位置を特定することはできませんでした。しかし、受信機の音響タグ信号とMiniPATの切離し時の水深記録から、弟島鹿浜近くで切り離されたと推測しました。また幸運にも、衛星発信機を体に付けたままのシロワニ3個体が、9月に二見港に戻ってきました。ベテランダイバーの協力により、3個体から衛星発信機の回収に成功し、そのうち2台から274日と342日間の世界初となる詳細な長期水深・水温データを入手することができました（図3）。

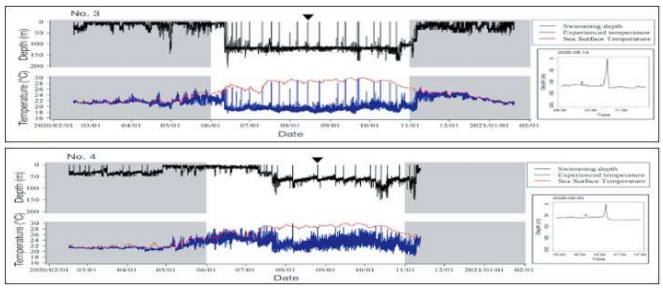



図3. 衛星発信機に記録された水深・水温（5秒間隔）（シロワニNo.3・4/メス）
▼:空気取込み行動（右グラフ）

この2個体は、その詳細な水深・水温データから、放流後は二見湾に滞在し、夏季の間水深70mと110m前後の場所に移動滞在し、秋に再び二見湾に帰ってきたことがわかりました。また、今回のデータには、海底から水面まで一気に浮き上がり、水面で空気を取り込み、再び海底まで一気に潜航する、シロワニ特有の「空気取込み行動」が、詳細に記録されていました。

2023年11月、シロワニの移動回遊生態を調査するため、父島周囲に14台の受信機を設置し（図4）、シロワニ9個体に、音響発信機と回収型の外付け行動記録計（水深・水温）を取り付け放流する、第2回捕獲調査を行いました。その後2025年6月には、聟島・母島列島と父島列島間の移動滞在を音響タグで確認するため、聟島列島に5台、母島列島に3台の計8台の受信機を増設し、合計22台による音響タグ観測網を整備し、現在列島間の移動をモニターしています。



図4. 受信機の交換作業（南浮磯）

## 生息個体数の推定

2025年と2026年の冬季潜水目視調査から、シロワニ個体識別台帳を基に、父島周辺に生息するシロワニ生息数をSchnabel法により116個体（95%信頼区間：84～164個体）と初めて推定しました（暫定値）。この結果、現在日本国内のシロワニは、小笠原群島にわずか116個体しか生息していないという希少性が明らかになりました。

## 画像提供のお願い

小笠原群島に暮らすシロワニたちをモニターするため、シロワニの画像提供の協力をお願いしています（図5）。ご提供頂いた画像は個体識別し、個体情報として保存させて頂きます。

図5. 画像送付先

【引用文献】
Nagahara, A., Zhu,Y., Nakamura,M., Hoopes, L.A., Nakaya, K.. Suzuki, I., Sato, N., Kuroda,M., Sakurai,Y., Minami, K., and Miyashita,K. (2025). Warm season escape to deep: habitat range and seasonal movement of sand tiger shark *Carcharias taurus* in Ogasawara Archipelago, Japan. Endangered Species Research, 58: 331-341.

# 汗をかきかき、いざ夏の母島の山へ！

ネイチャーガイド Irie Isle（アイリー アイル）宮川 五葉

小笠原の長い夏がいよいよ始まりました。小笠原と言えば海！というイメージが強い方も多いかと思いますが、小笠原の世界自然遺産はそのほとんどが陸域です。さらに母島の森は、父島では見ることのできない独特な動植物の宝庫です。是非母島にいらして世界遺産の森を堪能してください。今回は、これからの時期おススメの母島の味わいどころを紹介します。

## ☆まずはこれ！オガサワラオカモノアラガイ

「カワイイ～♡」とほとんどの人が声をそろえて喜ぶ、母島のアイドル的固有種のカタツムリ。通称「水まんじゅう」。透明の体の上に、全く体の入らない、ちょこんと小さな殻が乗ったその姿は、ちびまる子ちゃんの永沢君の帽子のよう。母島の標高300m以上の、常に湿った雲霧帯に適応して乾燥対策が必要なくなり、殻が小さくなる進化をした結果、このような姿をしています。そのため観光ルート沿いで見ることができるのは、乳房山や堺ヶ岳などの標高の高い場所です。秋～冬には産卵後に寿命を迎え、冬～春に数mmの子供たちが出てくるので、その時期はなかなか見つけにくいですが、これからの時期は最大4cm程度の個体が観察できます。特に霧がかかっているような日は絶好の水まんじゅう日和です。是非探してみてください。



図1. オカモノアラガイ

## ☆レア蘭の3種盛り！ オガサワラシコウラン・ハハジマホザキラン・ホシツルラン



図2. オガサワラシコウラン

オガサワラシコウランは7月ごろに石門（ガイドの同行が必須。現在は途中までで通行止めですが、そこまででも観察できます。）や乳房山の東側のルート沿いで観察できます。人の手の形のような花から、漢字で書くと「指甲蘭」です。

ハハジマホザキランは乳房山の山頂東側のコース沿いにありますが、ピンポイントでしか生育していないため、ガイドさん同行のほうが見落とさないかと思います。8月ごろに小さな紫色の可憐な花を咲かせます。

ホシツルランは超絶滅危惧種。野生株はすでに絶滅したとされており、桑の木山の植栽地で8月ごろに白く（小笠原の植物の中では）立派な花をつけます。それぞれ開花時期が少しずつずれていますが、タイミングが良ければ1度に3種すべての花を見ることもできるかもしれません。



図3. ホシツルラン

## ☆通におすすめ！ハハジマノボタン



図4. ハハジマノボタン

ハハジマノボタンは、7月ごろにピンク色で5弁の5cm程のとってもかわいい花を咲かせます。父島では白色4弁の「ムニンノボタン」、火山列島では紫色5弁の「イオウノボタン」が生育しており、適応放散によって島ごとに違う形態に進化した種です。ハハジマノボタンは、乳房山の山頂付近で見ることができます。普段は見落としがちな植物ですが花は存在感があるので、是非探してみてください！

暑い夏、真っ青な海に今すぐダイブ！という気持ちは十分すぎるほどにわかりますが、この時期にしか見ることのできない花などを探しに、是非、母島の山にも足を運んでいただければと思います。ただし、熱中症には十分注意して水分は多めにお持ちください！

# ＯＷＡ活動レポート　2025年度

OWAはクジラにも人にも優しいホエールウォッチングの振興とエコツーリズムの推進を目的として活動しています。
2025年度(2025.4～2026.3)に実施したOWAの主な活動を報告いたします。
活動にご支援・ご協力いただきました皆さま、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

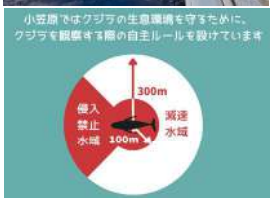
## 観光自然科学研究部門

貴重な自然環境の保全と、観光資源としての利用のバランスを図るために必要な情報を生み出すことを目的とし、調査・研究・モニタリング事業などを行っています。

★ホエールウォッチング(自主ルール管理)
★鯨類個体識別調査
★ザトウクジラ(音響調査・定点目視観測)
★沖合目視調査(小笠原水産センター)
★共同研究および協力
　*小笠原諸島周辺海域に来遊するザトウクジラの生態調査(ELNA)
　*遺伝子解析によるザトウクジラの繁殖生態解明(沖縄美ら島財団、ELNA、東京大学)
　*マッコウクジラID自動照合システムの開発(帝京科学大学、兵庫県立大学)
　*個体識別データを用いたマッコウクジラの生態把握(帝京科学大学)
　*小笠原実習コーディネート(帝京科学大学)
　*ロボットテクノロジーによるマッコウクジラの摂餌生態調査(山形大学)
　*ハシナガイルカ個体識別調査(帝京科学大学)
★南島利用状況調査(東京都)
★普及・各種対応・その他
　*学会・シンポジウム・論文等での研究発表
　*ストランディング対応






## ガイドセンター部門

調査・研究活動で得られた情報発信と、魅力的な観光資源を生かすためのガイド養成、観光客の満足度向上のため様々な活動を行っています。

★東京都自然ガイド養成事業(東京都)
★陸域ガイド養成事業(小笠原村)
★おがさわら丸船内イベント(小笠原海運㈱)
★小笠原中学校総合学習・大学実習
★観光船等へのインタープリター派遣
★IWO(新規講習・勉強会)開催
★誘客促進・普及啓発
　*クジラの陸上観察会
　*HP(ミナミハンドウイルカ個体識別サイト)制作
　*機関誌等発行、各種原稿執筆
　*SNS・HPによる情報発信









## 母島支部事業

★会員対応
★IWO勉強会実施



## 事務局

★総会・理事会　★イベント参加
★島内外各種会議　★物品貸出
★公益化申請準備　★商品販売



令和8年度 第17回通常総会開催

令和8年4月24日に開催された第17回通常総会において審議された次の議案は、すべて事務局案の通り承認されました。

【議　　案】
令和7年度事業報告・令和7年度決算報告
令和8年度事業計画(案)・令和8年度事業予算(案)
定款の変更および役員報酬規程の制定に関する件
公益社団法人への移行認定申請に関する報告
役員改選
【収支決算額】　53,249,537 円

【役　　員】
会　長：太田幸弘
副会長：佐藤博志・関　伴夫
理　事：石井　亮・小西稔紀・内藤文伸・南　俊夫
　　髙橋尚人・古川智裕・竹澤博隆
監　事：後藤直子

# BONINなんでも通信

ー海を想う、シャチに沼る。ー
BLUE WONDERS meets シャチカツ！

8月17日から9月２１日まで、ハンズ博多店にて「ー海を想う、シャチに沼る。ー　BLUEWONDERS meets シャチカツ！」が開催されます。クジラやシャチを入口に、海の不思議や魅力を「知る・感じる・楽しむ」コラボレーション企画で日本全国からイルカクジラグッズが集います。当協会からは「小笠原の鯨類クリアファイル」「小笠原の鯨類マスキングテープ」「和紙一筆箋小笠原のクジラたち」を出品しています。



お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

## フェリシモコラボ商品販売中！



※画像提供：フェリシモ

現在、フェリシモコラボグッズを販売しています。お求めは、オンラインショップ『Megaptera』またはOWA事務所まで！

## お便りコーナー

いつもとても楽しみにしています。
来年のどこかで「帰る」予定をしています。
クジラにもイルカにもたくさんあいたいです。

No. 97041　M. Y.

とても温かいお言葉をありがとうございます。ご帰島される日を心待ちにしています。たくさんの出会いがありますように！：編

去年（2025年）4月に還暦旅行で父島、母島に行きました。一航海なのにホエールウォッチング、ドルフィンスイム、乳房山登山と盛りだくさんの旅でした。最近はオガサワラカワラヒワの話をよく聞きますね。数が増えるといいですね。

No. 90251　A. G.

還暦おめでとうございます。オガサワラカワラヒワは小笠原自然文化研究所と上野動物園でそれぞれ繁殖に成功し、初めて飼育下繁殖個体のペアからも雛が誕生したそうです。順調に個体数が増えるよう願うばかりです。：編

OWA様の、小笠原近海の鯨類ポスターは宝物です。
いつか小笠原の海で、シロナガスクジラに会いたい。
ポスターやグッズ作成のエピソードetcも記事にしてはいかがでしょう。毎号楽しみにしております。頑張ってください。

No. 04037　T. K.

とても励みになるお言葉をいただきありがとうございます。シロナガスクジラは2018年に当歳児が鎌倉に漂着したことがまだ記憶に新しいです。私たちもいつか小笠原の海で出会いたいです！：編

## ～新職員紹介～

### 桑原剛志（くわはらつよし）

はじめまして。今年４月よりOWAの研究員となりました、桑原剛志と申します。大学ではマッコウクジラやスナメリのことを学んでいました。大学は長崎県の中心にありましたが、マッコウクジラがいるフィールドは遥か遠く、北海道の羅臼町や長崎県の五島列島へ通っていました。羅臼町の大柄なオス、五島列島の若いオスを見てきたうえで、小笠原のメスの群れを見ると、体の大きさや行動がとても異なり、まるで別の動物のように感じました。オスのマッコウクジラは成長すると産まれた群れから離れるとされており、小笠原で産まれた個体がどう成長し、どの海域へ旅立っていくのか気になるところです。

鯨類に次いで鳥も好きで、北海道とも九州とも大きく異なる海鳥相に日々歓喜しています。また、オガサワラオオコオモリやアカガシラカラスバトがこんなにも身近な生き物だとは想像していませんでした。



最近は休みになると、メジロやトラツグミの声で目覚め、島の各地で渡り鳥を探し、オガサワラオオコオモリを眺めながら帰途に就くのが習慣となっています。

⇦三島クルーズの際はネッタイチョウやシロアジサシが飛んでおり眼福でした。

表紙写真：とある日の朝早い時間帯に父島列島沿岸部で出会ったハシナガイルカ。30頭程の群れで行動しており、時折ジャンプをするなど、少々活発なご様子でした。その名の由来でもある、すらっとまっすぐ伸びた長いくちばしが美しいですね。

写真撮影：OWA

## 編集後記

- 推しのミナミハンドウイルカがいるのに全然会いにいけてない。今夏こそ、推し活するぞ～！！（工藤）
- 前回の『Megaptera』でご紹介したマッコウクジラの頭骨を、この夏、ビジターセンターにて公開中。ぜひご覧ください！（辻井）
- 小笠原に来て3か月で真っ黒に、秋には闇夜に溶け込んでいることでしょう。（桑原）

メガプテラバックナンバーは1部150円で販売しています。（会員のみ）